

## 第六章 おわりに

### 1 ある日のこと

この秋、ソフトボール部が大会で3位を獲得した。21チームが参加した地方の小さな大会とはいえ、何十年もの間賞状にはほど遠かったチームが、である。

ある日、練習を終えて仲良く下校する2年生部員に聞いてみた。「昨年と今年で何か変わったことがある？」と。「練習メニューを自分たちで考えるようになった」「試合後の月曜はミーティングを行うようにした」と部員たちが明るく答えてくれた。

チームを指導してきた教員は本校が初任、勤め始めて5年目になる。ソフトボールの経験も指導実績もない。それでも、時間を惜しまず部員と練習を共にしてきた。それでも、これまで大会1勝が精一杯であった。彼は国語科、この研究の教科の中心となって2年目になる。

教員が指導方法を変えたのか、生徒が工夫したのかは聞かなかった。ただ、教員も生徒も主体的な学びをキーワードに、学びに変化が生まれていることを実感した。

### 2 研究を終えて

本研究では、「社会に貢献する生徒の育成」を目指してきた。教科のみならず、ホームルームや学校行事、家庭クラブなどに研究の場を広げていくことで、生徒自身が「主体的」「対話的」に学ぶことを、少しずつではあるが身につけていると思われる。そして、「主体的」な学びと「対話的」な学びを結び付けることで、生徒たちの関心・意欲と表現力の向上につながることで、研究の様々な場で見受けられた。

研究を進めるにあたって、国語、数学、英語の3教科をはじめ2年間にわたり大学教授による指導法研究の支援を得られたことは誠に大きい。ワークショップを通して主体的な学びに向けての課題を、全教員が共有することができた。研究授業等では、教科担当者が個別に支援や相談を受けたり、また当日の授業を見ながら直後にアドバイスを得たりすることができた。

平成26,27年度に研究指定を受けていた愛知県立加茂丘高等学校には、研究支援員として本校研修会へ教員を派遣していただいた。また、本校からは授業参観に多くの教員を受け入れていただいた。その他、県内外を問わず、他校を訪問して授業参観を行った。学校の取り組みを聞いたりすることは、教員の大きな刺激になった。

この度の研究機会がなければ、新学習指導要領の柱の一つである、主体的・対話的な活動に対する教員の意識は高まらなかったであろう。そして、早くから授業改善を実践し、研究の中心になった若手教員が、新学習指導要領に沿った教育活動の中心となって活躍することを期待する。大きな転換期を迎えた今、これを一時の研究とせず今後のカリキュラムマネジメントに繋げていきたい。



